

經濟評論

The keizai hyōron 昭和27年4月23日第3種郵便物認可
1990年10月1日発行(毎月1回1日発行)第39卷(通卷45卷)第10号

東欧市民革命のエピステモロジー——平田清明

ユーロレフトの新しい模索——真柄秀子

——イタリア社共の対立と接近

財政再建の実際と理論——青木信治

国際朝鮮学会素描——朴 一

●連載

コルナイ・ヤーノシュに聞く

わが思想と経済学——コルナイ・ヤーノシュ

ヒックス追悼

遺著『貨幣の市場理論』への覚書——井上義朗

経済学の再生のために

擬制資本の整理と生産の回復——小野田猛史

日本経済ミニ・スコープ

演出された「貢献策」——S.N.

水辺からの告発

琵琶湖の事実の隠蔽——辻田啓志

経済学文献月報——大阪市立大学研究所

10

1990 October

日本評論社

講演者

コルナイヤーンシユ氏



わが思想と経済学

コルナイ・ヤーノシュ
聞き手 盛田常夫

解説

コルナイ経済学の特徴

不足の経済学

現代のソ連・東欧圏を代表する経済学者として著名なコルナイ・ヤーノシュは、社会主義体制のハンガリーから亡命することなく、西側の経済学界に地位を築いた人である。こうした事例はコルナイを措いてほかにない。一九八六年にハーバード大学経済学部のテニユア（終身雇用権）を獲得し、一年の半分ずつをブダペストとボストン・ケンブリッジで過ごしている。

「物不足」が恒常的に再生産される世界、それが現存の社会主義経済だ。「不足」が社会主義経済の一般的な特徴であるという議論は、社会主義の建て前と反するからである。そのソ連でも、漸く八九年に出版が許可された。しかし、今度は経済的技術的な問題で発刊が遅れている。

異端の経済学

『反均衡』で華々しいデビューを飾ったコルナイは、一躍、西側経済学界に知られることになった。インタビュのなかで、著書で批判の対象としたケネス・アロー（ノーベル経済学賞、新古典派理論の代表者）から、著書の出版にあたって温かい励ましを受けたことを語っている。西側の正統派経済学にたいする射た批判の書が、社会主義のハンガリーから出てきたことそれ自身が驚きであった。アローは批判者コルナイの可能性を認めたのである。

すでに『反均衡』のなかで、コルナイは現存の経済システムを分析する新しい視点を提供している。なかでも、資本主義も社会主義も不均衡を基調とする経済であり、それぞれ「ブッシュ型経済」と「ブル型経済」として特徴づけられると主張した。売り手が商品市場へ押し込むのが圧力（ブッシュ）市場、買い手が市場から商品を引き上げるのが吸引（ブル）市場というわけである。ブル市場の一般化が、『不足の経済学』へと発展した。

ハイブリッドの経済学

経済であるという発想は、社会主義への新しいアプローチを編み出した。すでに「不足の経済学」コルナイ経済学は、ハンガリーから生まれた一つの学派として定着しつつある。大著『不足の経済学』の普及についていえば、フランス語版（八四年）、ポーランド語版（八五年）、中国語版（八六年）と出版されてきた。とりわけ、中国では八万部のベストセラー経済書になっただけでなく、彼の著作がすべて中国語に翻訳し、経済改革の推進に援用された。

チェコスロバキアとソ連では内部資料として翻訳されたが、一般書店に並ぶことはなかった。ゴルバチョフのブレインになるアガンベギヤンが所長をしていたノボシビルスクの研究所では、内部翻訳資料としてコルナイの著書が研究されていた。チェコスロバキアでも、内部資料として狭い範囲に流通していたが、一般読者の手には入らなかった。

インタビュで詳しく語られるが、コルナイ経済学を形成したものは、彼の家庭（ユダヤ人という運命）であり、戦後に樹立された社会主義であった。彼の青年時代はマルクス主義の吸収に向けられた。戦後、『資本論』のハンガリー語版が出版された時、その第一号の書評は彼によって書かれた。この時代の思想形成を抜きに、彼の経済学を語ることはできない。

スターリンの死後、マルクス主義と社会主義の将来に疑問をもったコルナイは、ハンガリー動乱を契機に、西側の正統派数理経済学を学ぶことになる。数学が得意だったコルナイは、一〇年で西側数理経済学界に知られる存在になった。この時期は、彼にとって新古典派数理経済学の時代である。

コルナイ経済学はいわば二〇代半ばまでに学んだマルクス主義の否定と、三〇代を通して学んだ新古典派経済学の否定から出発する。「否定」は裏からみれば「総合」である。それが『反均衡』を經由して、『不足の経済学』へと結実した。

東の世界と西の世界に同時に生きようとし、またそれをかたくなに追い続けたコルナイは、独自の境地を切り開いた。人として経済学者として生きてきたコルナイの一生は、二〇世紀人類社会の変遷そのものであった。彼にとって、それはまた、二〇世紀社会主義の可能性の模索でもあった。

ハーバード・スクエアから歩いて五分。閑静な住宅地のなかに、ハーバード大学が所有しているマンションが並んでいる。その瀟洒なマ

ンションの一角に、コルナイ宅がある。コルナイ教授は夫人で数理経済学者のダニエル・ジュジャと二人で、ポストン・ケンブリッジの生活を送っている。教授は新しい著書『社会主義政治経済学』が完成するまで、ケンブリッジに滞在する。

今回のインタビューでは、幼年期からの思想遍歴について聞く。これまで、コルナイ教授は自らの思想遍歴について、公の場で語ったことはない。長年の友人であるインタビューアにとっても、コルナイ教授自身にとっても、このインタビューは新しい経験である。

ハーバードの生活

盛田 ハーバード大学へはいついらっしやったのですか。

コルナイ テニユアを獲得したのは一九八六年ですが、実はその一年前、八四年も八五年にハーバード大学から一年間の招聘を受け、滞在していました。

盛田 バークソン教授（ソ連経済論、厚生経済学の権威）の後をお継ぎになったのでしょうか。

コルナイ ここハーバードでは後継者という観念はありません。一般にアメリカの大学ではそのような観念はないのです。ヨーロッパであれば、学科長の椅子が空いたときに、誰かがその後座るということはあります。しかし、アメリカの大学ではすべての教授は同等ですので、そのような観念や慣習はありません。

ものと捉えれば、制度学派に近いとはいえますが、私自身の意図は多くの経済思考の潮流の統合にあります。

盛田 ハーバード大学では何を教えていらしゃるのでしょうか。

コルナイ 最初から、二つの科目を担当しています。一つは、「社会主義的政治経済学」です。社会主義経済全体をみるわけですが、経済だけでなく、政治の問題も含まれます。これは二四回の講義を、二つのセメスター（学期）に分けておこなっています。いま一つは、「ワークショップ」で、いわゆるゼミナールです。ここでは学生が用意した研究報告を私と参加学生が聞き、議論するという形で進行します。これら二つとも、大学院のコースに設置されており、いわば上級レベルの科目になります。

盛田 一年を半分に分け、半年をブダペスト、半年をハーバードという生活ですが、この二重生活にはどのようなメリット、デメリットがあるのでしょうか。

コルナイ もちろん困難なこともあります。大きな利点があります。「比較体制論」の専門家であれば、書物で学んだり、短期の旅行で学ぶだけでなく、実際に生活してみることが大きなメリットになります。アメリカに生活し、アメリカの中からアメリカのシステムを知り、他方でハンガリーのシステム

ません。

専門領域においても、重なるところもあれば、違うところもあります。バークソン教授はソ連経済の専門家であり、他の諸国の研究はほとんどおこなっていらっしやいません。また、彼には「厚生経済学」という確固とした理論経済学の専門領域もあります。私の専門領域は、アメリカの区分けでいきますと、「比較経済体制論」ということになり、一般的な体制比較の研究に重点があります。付け加えれば、東ヨーロッパが狭い意味での別の専門領域ということになります。

盛田 コルナイ教授が法政大学の招聘で八三年に日本にいらっしやった時に、宇沢弘文教授はコルナイ理論を制度学派に属するものと説明されていました。また、最近ではフランスのレギュラシオン学派が、ハンガリーに独自に発生したレギュラシオン学派だとも特徴づけていますが、教授自身はどうでしょう。

コルナイ そのような親近性があるかと思いますが、私自身は自分の思考がどこかの学派に属しているという意識を避けてきました。というのも、これまで多種多様な経済学の潮流から学んできましたし、多くの学派からヒントを獲得してきたからです。このようにして、独自のものを造りあげてきたと考えているからです。もちろん、単純に制度学派を新古典派に対抗す

を肌で知っているということになります。それがちょうど、資本主義の世界と社会主義の世界の典型であるとしたら、しかもそれを内部からみているとすれば、これはたいへん大きな利点です。

いま一つの利点は、精神生活の二重性です。ハンガリーの政治的・知的な潮流や経済的変化を内部から観察してきましたが、アメリカではまた違った人々や潮流と出会うことができます。これら二つのものを、自分のなかで関係づけることができます。これも大きな利点になります。

盛田 ハーバード大学ではこのような二重生活を送る教授は、他にもいらっしやるのでしょうか。

コルナイ 社会主義国からは私一人です。他の事例でも、アイルランドの詩人に同じように半年ずつ、祖国とハーバードを行き来することが認められています。これは例外的な措置です。というのも、ハーバード大学は教員にたいして、一年のすべてを大学で仕事をするように求めています。恒常的に二つの国を往來しているケースは、アメリカ全体をとっても、たいへんに稀なものではないでしょうか。

盛田 それはハーバード大学が、コルナイ教授に与えた特別サービスでしょうか。

コルナイ これには二つのことがあります。一つは、これが

私の条件だったことです。つまり、大学が招聘を要請した時に、これを契約条件として提示しました。もう一ついわせていただければ、専門家としてもそのことが重要だと感じたわけです。

これは医学の研究のたとえでもいえます。医者であれば、いろいろな患者をみることに執着するのと同じです。まして私は社会主義を内部から観察できる可能性がすでに存在していたわけですから、それに執着しました。

実はこの時期、四つのアメリカの大学と一つのイギリスの大学から招聘の打診があり、そのこともあって、ハーバードは私の条件を飲んだのです。

盛田 ハーバードのテニユアはいつまででしょうか。

コルナイ 年金年齢までですから、現在でいえば七〇歳です。ただ、この制度については議論がおこなわれている最中です。

盛田 今年は講義はお休みのようですが、お体の具合が、かなり悪いのでしょうか。

コルナイ 八九〇年度はサヴァティカル（研究休暇）

で、新しい著書の執筆に専念しているところです。

幼年時代と学校生活

盛田 それはどのような影響を与えたのでしょうか。

コルナイ ヒットラーがドイツを支配して間もない頃から、学校でもその影響が出てきました。それまで、この学校はワイマル共和国の時に設立されたこともあって、ハンガリーの学校より、よほど自由な雰囲気がありました。それがヒットラーの登場とともに、外国の学校にまで精神的な影響を及ぼすようになりました。一二歳のある日、学校へ行くと、ヒットラー・ユージェントの制服と例の褐色のシャツを着た級友が座っているのに驚きました。

盛田 クラスにはハンガリーの少年たちも居たのでしょうか。

コルナイ ハンガリー人も居ましたし、ドイツ少数民族の子弟たち、それからドイツ系の会社や大使館の子供たちが居ました。

盛田 国際的な学校だった。

コルナイ そう、アメリカの級友、ブラジルの級友もあり、なかなか良い学校でした。ところが、八年生を終えた時、校長

盛田 今まで、教授の生い立ちや思想遍歴について、書かれたり語られたことがありますか。

コルナイ いやありません。ですから、昨日一晩、質問事項のリストをながめながら、何を話そうかと頭を整理しました。

盛田 教授は一九二八年にブダペストでお生まれになった。コルナイ そうです。父は弁護士で、ブダペストではかなり知られた人でした。ドイツ系の会社の顧問弁護士で、とくに裕福というわけではなかったが、そこそこの生活ができました。

兄弟は四人で、私は末っ子でした。当時のブダペストにはドイツ語学校があり、いわゆる「ドイツ帝国学校」というギムナジウムに通っていました。すべてドイツ語の授業でした。

盛田 それは小学校からですか。

コルナイ 一二年制で、四年の小学校と八年のギムナジウムから構成されていました。今は八年の小学校に四年のギムナジウムですが、戦前は今とはちょうど逆になっていたわけです。この学校で、私はほとんど母語のようにドイツ語を話していました。

盛田 その頃はドイツ語が流行だったのででしょうか。

コルナイ 一九四五年まで、ハンガリーの第一外国語はドイツ語でした。それにはいろいろ理由があります。まず、ハンガリーとオーストリアが第一次世界大戦まで、共同の陣営を形成

がユダヤ人生徒の親を集め、学校を移るように伝えたのです。そういうわけで、ハンガリーの学校に移りました。

盛田 それは一九四〇年のことですか。

コルナイ そうです。その時わかったことは、ドイツ語学校よりハンガリーの学校の方が、よほど民族主義的で反ユダヤ主義的だったことです。

盛田 それは生徒がですか。

コルナイ いや、教師がです。話は少し先に進みますが、四年に戦争の前線がハンガリーに達し、その三月にドイツがハンガリーを占領しました。それからおよそ二週間経って、父が捕らえられました。最初はハンガリーのキャンプに収容され、その後、アウシュビッツに連れていかれ、そこで殺されました。

盛田 お父さんだけが連れていかれたのですか。

コルナイ 父だけです。一番上の兄は、ソ連の前線に駆り出されて、そこで死にました。四年の十一月には、矢十字党*が私を捕らえ、ブダペスト近郊の労働キャンプに連れていきましたが、数日後、そこから逃げ出したのです。

*ハンガリーのファシスト党。ドイツのハンガリー占領の後、ユダヤ人狩りをおこなった。

ナチからの解放と戦後の活動

盛田 どこへお逃げになったのですか。

コルナイ カトリックの修道院です。そこに隠れていました。一九四五年の一月初め、ソ連兵が地下室に現われ、やっと解放されました。四五年はギムナジウムの最後の年でしたから、夏に卒業しました。それから大学へ登録を済ませ、歴史・哲学を専攻しました。もつとも、この時期には政治的な関心が高まり、当時の共産主義青年運動（ハンガリー民主主義青年連合）に入っていました。

盛田 当時、大学は機能していたのですか。

コルナイ 機能していましたが、私自身は四五年の秋から青年運動に没頭しましたから、たまに大学に顔を出すだけで、形式的に大学を卒業しただけです。大学では何も学びませんでした。中央機関のある部署で、ヘゲドシュ・アンドラーシュと一緒に仕事をしていました。五六年動乱の前に、一時期、首相を務めた人物です。

盛田 今は社会学者として活躍している。

コルナイ そうです。当時の青年運動をおこなった友人たちは、後に著名な政治家になっていきました。計画庁長官になったサライ・ベーラもそうでしたが、私のもつとも親しい友人は

ケンデ・ピーテルでした。彼とは小学校時代からの親友で、青年運動でも、その後の仕事場でも、一緒でした。五六年動乱の後、彼はフランスに亡命し、パリのハンガリー人亡命組織の指導者になりました。パリでは、「ハンガリアン・ノート」と題する亡命者の機関誌の編集者でした。

盛田 今もパリに生きておられる。

コルナイ そうです。彼とは最後まで、ほぼ同じ経歴を迎った親友でした。

盛田 青年運動から、今度は機関紙編集局へ入られた。

コルナイ 四七年に機関紙「自由の民」（サブッド・ネーブ）に招聘されました。これは共産党の中央機関紙で、四七年から五五年の春まで、記者として勤めることになりました。この時期の私は、つまりスターリンの死までの私は、意識の上でも、また活動の上でも、確信的な共産主義者でした。機関紙編集局に入ると同時に、私の中には経済問題への関心が膨れ上がってきました。勤めて二年目に、経済記事の責任者になり、そこで経済問題だけを扱うようになりました。その意味では、経済学は完全な独習でした。つまり、「経済学とは何か」を大学で学んだのではなく、経験と記事を通して学んだのです。

盛田 たとえば、どのようなテーマを扱っておられたのでしょうか。

盛田 この時期、教授は経済学を現実の経験から学ばれたということになりましたね。

コルナイ その通りです。ゴロッキーに青年時代を描いた「私の大学」という本があります。私にとっても日常経験が大学だったわけです。もつと正確に言えば、新聞記事や報告から学んだというのではなく、システムがどのように動いているのかを、その場に居てしっかりと観察したということなのです。書物はたくさん読みましたが、この時期は主としてマルクス主義を勉強しました。

盛田 『資本論』もこの時期に読まれた。

コルナイ 『資本論』はとくに丁寧に読みました。戦後、ハンガリー語訳が出る前に、ドイツ語で全部読み切っていました。

盛田 それは何歳の時でしょうか。

コルナイ 最初に読んだのは、一八歳の時です。そして、ハンガリー語訳が出版された時、一九五〇年だと思っています。その時、『資本論』にかんする最初の書評を書きました。ナジ・タマーシュが翻訳し、最初の巻が出た時に、書評を書いた覚えがあります。とにかくマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンのものを丁寧に読みました。自分で考えても、よくできたマルクス主義者だったと思います。党学校にも通いました。

コルナイ 計画化、発券制度、その導入と廃止、価格問題、予算、五カ年計画です。この時期は、いわば共産主義経済がどのように機能するかを内部から観察した時代なのです。

批判的な印象をもつこともありましたが、総じていえば完全な共産主義者で、もし経済に何か問題があるとすれば、それは企業経営者や政治指導者の誤りから生じるものだという確信をもっていました。

盛田 当時の編集局はどのように作業していたのでしょうか。

コルナイ 私自身は日常的に一〇、二人の同僚を指揮していました。それから、党のナンバー2で、経済問題の責任者であったゲルー・エルヌ・主宰の委員会に毎週、出席していました。正式な委員ではありませんでしたが、機関紙の記事のために出席していたのです。この委員会ですべての経済決定がおこなわれており、フリッシュ・イシュトヴァーンが*この委員会の書記でした。

*ハンガリーのスターリンと呼ばれたラーコシ・マーチャーシュの右腕で、ラーコシの失脚の後、動乱勃発時まで首相を務めた。

**後に、科学アカデミー経済研究所の初代所長になり、コルナイの受入れと退放の双方に係わった人物。

マルクス主義への道

し、多くのセミナーに出席し、講演もおこないました。本当に慎重かつ詳細に勉強したものです。

盛田 それほどまでマルクス主義へ傾倒させたものは、戦争時の体験ですか。

コルナイ 多くの出来事が一緒になっていると思います。戦争とファシズムがその一つであることはいうまでもありません。当時のホルティ政権*がファシズムと闘うのではなく、それと一緒に進んでしまったという意識です。ナチの最後の傀儡であるこのハンガリー政権が、父と兄を殺し、私をキャンプに閉じ込めた。この旧体制が私をもっともラディカルな反対派へと駆り立てたといえましょう。

いま一つは、社会的な意識というか責任感というものがあつたと思います。四四年にドイツの占領がおこなわれ、迫害が始まった時、私は肉体労働者としてレンガ工場働いていたことがありますが。そこで、労働者の生活を知り、旧体制が労働者を圧迫していることを知りました。これが労働者への連帯の感情となりました。

盛田 理論的な側面で、マルクス主義の魅力はどこにあつたのでしょうか。

コルナイ それはもう、マルクス主義の論理性と一貫性は大きな知的影響を与えました。青年にとって、すべてのが説

明でき、すべてのものに解明の鍵を与え、すべてのものに判断を下すことができるような思想体系は、たいへんなものでした。

ですから、政治的な理由、社会的な意識、それからマルクス主義の閉じた論理性、この三つが精神的な支えとなって影響を与えたと思います。

*オーストリー・ハンガリー艦隊の最後の司令官で、一九一九年に樹立されたハンガリー社会主義共和国（二三三日続いた）を打倒し、四四年のドイツ占領までハンガリーを支配した。

経済記者時代

盛田 機関紙編集局内部の状況について、少しお話をいただきたいのですが。

コルナイ 編集局の知的水準はかなり高いものでした。編集局長はレーヴァイ・ヨージェフ*で、彼は根っからのスターリン主義者でしたが、なかなかのインテリで、賢い男でした。仕事の上での直接の上司はギメシュ・ミクローシュ*でした。彼は後にナジ・イムレの側近として一緒に処刑され、昨年六月一日の埋葬式とともに安置された人です。

盛田 ということは、すでに編集局内部にさまざまな潮流が存在していたということでしょうか。

での直接の上司はゲルとフリッツシュ*でした。ゲルは党の経済政策の最高責任者で、フリッツシュは党本部の経済政策局の局長でした。

盛田 ところが、五三年春のスターリンの死で、大きな動揺が生じた。

コルナイ そうです。スターリンの死後、数カ月でナジ政府が形成され、レーコーシ時代に監獄に捕らえられていた人々が続々と出てきたのです。そのなかには、二人の同僚記者がいました。一人はロシヨソツィ・ゲーザ*で、彼もまた後にナジ首相とともに処刑された人物です。もう一人はハラストイ・ジャンドール*で、彼が私に国家保安局での拷問の模様を語ってくれました。共産主義青年運動とともに進めてきた友人が、このような仕打ちにあつたとは、思いもよらないことでした。

次から次に監獄から出てきた人々が考えられないような出来事を語るの、まったく驚いてしまったわけです。

*一九一八年のハンガリー共産党創立者の一人。ジャーナリストで、戦後の共産党指導者の四人組のうちの一人。

*一九一九年のハンガリー社会主義共和国（二三三日間）で政府の閣僚を務め、長らくソ連に滞在していた。戦後、ハンガリーに戻り、社会主義化の先頭に立った。ハンガリーの小スターリンと呼ばれた。ソ連共産党がもっとも信頼していた指導者で、スタ

コルナイ いや、それは一九五三年までは不可能でした。完全な統一のもとにあつたといつてよいでしょう。編集局全体が何か奉仕と献身に満ちた犠牲的精神で、朝から夜遅くまで働いていましたから。何か素晴らしいものを造りあげているのだという確信に満ちていました。実際、そこに働いていた人々は何カ国語も話し、洗練された自覚的な共産主義者でした。けつしてやくざな集団ではなく、いわば殉教者のように働いていたのです。すべての動揺は、五三年に始まりました。

盛田 それまで、レーコーシ**の個人崇拜の影響はなかったのでしょうか。

コルナイ もちろん、それはありました。というのも、レーコーシは機関紙を掌中に収めようとしていましたから、毎日、編集局に電話をかけ、どの記事が気に入ったとか入らなかつたとか、あれこれについて記事を書けと指示していました。でもそれは単純に個人崇拜というのではなく、レーコーシ、ゲル、レーヴァイ、ファルカシュ***を入れた党指導部が、四人組が編集局を抑え、指揮していたということですが。

盛田 レーコーシとも面識は。

コルナイ もちろんありました。ゲルとは先にお話したように、毎週、顔を合わせていました。レーヴァイは後に、党本部に移つたので、彼とはあまり会わなくなりましたが。党機関

ーリンは彼を通じて、各種のスパイ摘発キャンペーンを指示した。五六年初夏に党の役職を解かれると同時にソ連に行き、死ぬまで戻らなかった。

***ラーコーシ、ゲルー、ファルカシユはトロイカ、これにレヴァイを加えたものが四人組で、彼らがほぼ党と政府の全権を握っていた。ファルカシユは四九年にライク外相をスパイ容疑で処刑した責任をラーコーシから押し付けられ、五六年初夏の党中央委員会で党を除名された。

反スターリン主義への転換

盛田 機関紙編集局にいらっしやって、そのことは思いもよらなかった。

コルナイ 新しい体制を造りあげているという確信でいましたから、その体制が無実の人々を監獄に追いやり苦しめていたことなど、思いもよらないことでした。ですから、他の同僚とともに、大きな倫理的動揺がおきました。いったい、われわれはこれまで何をしてきたのかと。良かれと思ってしてきたことが、殺人までひき起こし、無実の人々を陥れていたわけです。これにたいして、怒りをもち始めました。

盛田 そのところ、もう少し話していただけませんか。

コルナイ 私の動揺を誘ったものは、計画経済が十分に効率

盛田 教授も発言された。

コルナイ 発言しました。全部で八人ほどだったと思えます。これがもて、この数カ月後にラーコーシがナジ・イムレを政府と党から追放した時に、われわれもまた編集局から追放されました。そこで、経済研究所へ移ったわけです。

盛田 それはいつのことでしょう。

コルナイ 五五年の春です。二七歳でした。政治局が八人を編集局から追放すると決定してからです。というのは、実は、記者を辞めて、研究の道に入りたいという希望を長年もっていました。しかし、政治的な任務のために、それが許されなかった。五三年からそのことを要求していたのですが、適いませませんでした。ところが、編集局から追放されたことで、研究者への道が開かれるようになったのです。ちょうどその頃、フリッシュが経済研究所を開設したばかりで、まだ一〜二カ月もたたない時でした。

盛田 フリッシュの推薦で研究所に移られた。

コルナイ フリッシュとナジ・タマーシユの二人の推薦で、研究所に入れたわけです。ただ、編集局ではかなり高いポストにいたので、大きな部屋と秘書もいましたが、研究所では部屋も小さくなるし、給料も半分になりました。しかし、そこで新たに研究者として出発する場を獲得したのです。

的でないとか、経済システムが機能していないということではありません。私は倫理的な理由で共産党に入りましたし、倫理的な動機が駆り立てました。したがって、この気持ちが高まれば、知的な道の修正をひき起こしたのです。人は言葉によって道を選択したり、失望したりするのではなく、倫理的な出来事を基礎にしてそうするのです。

盛田 ラーコーシのスターリン主義的体制への疑問が、大きな転換の契機になった。

コルナイ そう、無実の人々が監獄から出てくるのをみて、はたしてこの体制はこれだよいかという疑問をもたざるをえなかった。それは編集局の同僚の誰もが突き詰めて考えなければならぬ問題でした。

盛田 それは何か具体的な動きとなったのでしょうか。

コルナイ 一九五四年の秋に、編集局の党会議があり、そこでラーコーシ型の党指導にたいする反乱がありました。これは後に、「自由の民の反乱」と呼ばれたものです。何人もが発言し、指導部を批判しました。そのなかには、メライ・テイポールがいました。彼は後に亡命者の文学新聞の編集に携わっていました。昨年のナジ首相埋葬式で弔辞を述べています。ロチエイ・パールも発言しましたが、彼は動乱の後に、八年間も監獄で過ごすことになりました。

ソ連型社会主義の批判

盛田 五三年以降、次第に教授の世界観、哲学が変化してきてたのでしょうか。

コルナイ そうです。ある日突然に変化したのではなく、五三年から五五年にかけて次第にスターリン主義の厳しい批判者になっていきました。現在の用語法でいうと、五五年の私は改革派共産主義者だったといえます。

つまり、ハンガリーで社会主義を維持しなければならないと考えていた点で、いまだ共産主義者でしたが、これを民主主義的なものに改革し、官僚主義的な集権制を止めなければならぬと考えていた点で、反スターリン主義者だったわけです。

盛田 マルクス主義者ではあるが、スターリン主義者ではないコルナイが、経済研究所に入って博士候補學位論文を書き始めた。この執筆はいつ始められたのでしょうか。

コルナイ すでに研究所に入る前から、論文のテーマは「過度集権制」に定めていました。學位論文アドヴァイザーはナジ・タマーシユでした。

盛田 博士候補學位というのは、どのような學位と考えたらよいのでしょうか。

コルナイ アメリカの大学でいえば、PhDに相当するとい

盛田 論文を書き始められたのは。

コルナイ 五五年の夏からです。すでに五四年から、非マルクス主義、非共産主義の文献を読み始めていました。雑多な潮流のものを貪り読みました。自分を再形成しようと考えたわけです。反共産主義の視点からのソ連の歴史にかんするもの、トロツキー、ジラス、ユーゴスラビアの文献、それから社会民主主義の潮流、カウツキーなどです。また、この時期に、シュンペーターの『資本主義、社会主義、民主主義』を読みましたし、マックス・ウェーバーなども読みました。とにかく、それまでとはまったく違った傾向の文献を読みあさったのです。

盛田 論文はいつ出来上ったのでしょうか。

コルナイ 最初の草稿を五六年の春に仕上げ、研究所の討議にかかけました。たいへん好評で、所長のフリッツシュも満足し、給料を上げてくれただけでなく、賞与まで出し、身分も助手から研究員に格上げされました。

盛田 論文の題名は、「過度集権制と物質的利害関心の若干の問題…軽工業の経験を基礎にして」ですね。ソ連型の中央集権的経済管理を痛烈に批判したものだったわけですが、論文審査はどのように進んだのでしょうか。

コルナイ 審査は十月の「革命」勃発直前の九月でした。審

査委員長は当時の統計局長官のピーター・ジョルジュでした。通常の学位審査にしては多くの人々が集まり、審査はさながら政治集会の様相を呈していました。その頃の政治的な熱気を反映するものだったと思います。

盛田 その時、博士候補学位を授与されたわけですが、新聞や雑誌にも論評されたのでしょうか。

コルナイ 党機関紙「自由の民」を含め、私の論文をたいへん高く評価してくれました。ただし、後にそれが著書として出版された時には、党機関紙から激しい攻撃を受けることになるのですが。

盛田 話は若干戻りますが、ピーター・ジョルジュはすでに五四年暮れに、経済改革を提言する論文を出しています。教授はピーター長官と以前から面識がおりになった。

コルナイ 個人的に知っていました。頻繁に会い、互いに意見を述べ合いました。彼からは多くのことを学びましたし、彼もまた私の意見をよく聞いてくれました。